

令和 2 年 5 月 29 日現在

機関番号：17701

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18485

研究課題名(和文)アニメの「声」の文化とその制度化を言語学、現代思想、メディア論の協同で捉える試み

研究課題名(英文)Anime voice as a sociocultural entity of contemporary Japan

研究代表者

太田 一郎(Ota, Ichiro)

鹿児島大学・法文教育学域法文学系・教授

研究者番号：60203783

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,900,000円

研究成果の概要(和文)：アニメ声優が演じる「声」の音響的独自性が人びとの「感覚」に内面化した社会文化的な制度として確立している様子を主に言語学とメディア論の観点から複合的にとらえることを試みた。(1) 女性声優のアニメの声と一般女性の声を比較した結果、アニメの声にはより多くの倍音成分が含まれるなどスペクトル包絡に関わる特性が見られる、(2) アニメと声をめぐる状況は「声優とキャラの間の「演技」、キャラとファンとの間の「受容(消費)」」、ファンと声優の間の「情的関与」が考察の対象となる、(3) アニメ・声・身体の関係の議論についての重層的な声の受容を論じる聴覚文化論や「音象徴」などの言語学的知見が有効なことなどを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的・社会的な意義は、[1] 音響分析や発話実験によってアニメの声質と一般人の声質の音響的な特性に異なりがあるという言語学的知見を得たこと、および[2] 独特の音声的特徴を「声の触覚性」という現代思想の概念を援用して感覚面から捉えるために、ポップカルチャー史、メディア史を背景に声優の系譜を洗い出し、声優研究には映像という視覚的要素が不可欠であることを指摘したこと、[3] 音韻論的体系を越えて新たに生まれてくる言語現象を、歴史的・文化的文脈へ位置づけながら文化として確立する様相に着目するという、言語と文化の関係を捉える研究に新たな転換の可能性を示したことにある。

研究成果の概要(英文)：From the perspectives of linguistics and media studies, we tried to see how the acoustic quality of the anime voice performed by voice actors is established as a sociocultural entity which is internalized in the contemporary Japanese society. Our main findings are as follows: (1) The anime voice has its own unique characteristics in the spectral slope, which indicates that it contains more harmonic components. (2) To see how the anime voice is being embedded in popular culture, it is necessary to consider voice actor's "performance" designing anime characters, anime fan's "acceptance (consumption)" of characters molded by voice actors, and "emotional engagement" that fans feel for voice actors. (3) Other fields of media studies and linguistics such as auditory culture studies or the theory of sound symbol could provide promising perspectives for discussing the interrelated nature of anime, voice, and voice actor's body.

研究分野：社会言語学

キーワード：社会言語学 アニメの声 メディア論 音声学 声の文化 声優

様式 C - 19 , F - 19 - 1 , Z - 19 ( 共通 )

## 1 . 研究開始当初の背景

研究代表者 ( 太田一郎 ) や分担者 ( 宇都木昭 ) らが数年の間協同して行ってきた研究により , 言語の体系面の変化とメディアが提示するものへの話者の社会的 , 心理的志向性との関連などを示すことはできたが , 近年の急速なメディア環境の変化は人びとの言語に対する「感覚」にも何らかの影響を与え , 言語の新たな社会文化的制度化が生じているのではないかと疑われる。その顕著な例が , アニメなどの「声」とその「質」の問題である。アニメやゲームの声優たちが発する「声」は , 言語学のみならずポピュラーカルチャー論 , メディア論 , 心理学 , 工学系の研究など多方面に関わる様相を持つため , これまでの学問分野の枠組みを超えた取り組みが求められる。そこで本研究は , 物理的な現象としての「声」とアニメを中心としたメディア文化がどのように結びつくかという問題に , 音響分析等で明らかにされる「声の質」を , 現代思想やメディア論の概念と接続させることによって取り組み , 言語文化研究の新たな可能性を探るために構想した。

## 2 . 研究の目的

テレビの普及とともにアニメは広く社会に受容され , 現代日本のポップ・カルチャーを代表するジャンルに発展した。アニメに関わる問題で , 近年言語文化的観点から注目されているのは , アニメ声優たちが発する独特の「声」である。高度にメディア化が進んだ現代において , アニメ声優が演じる「声」は , その「発声 (phonation)」の音響的独自性によって , 人びとの「感覚」に内面化した社会文化的な制度のひとつになったと考えられる。そこで本研究は , [1] 音響分析や発話実験によって「声の質」の物理的特徴をあきらかにし , [2] その特徴を「声の肌理」( ロラン・バルト ) や「触感性 (haptique)」( ジル・ドゥルーズ ) などの現代思想の概念を援用して「声に触れる」という感覚面から解釈することにより , 音韻論的体系を越えたアニメの「声」が社会的文化的に制度化される様相を捉える。さらに , [3] メディア論と社会言語学の視点から , 「声の質」の歴史的 , 文化的文脈への位置づけをあきらかにし , 言語と文化の関係を捉える研究に新たな転換の可能性を示すことを試みることにある。

## 3 . 研究の方法

### (1) 音声学および社会言語学による検討

「声」の質の音響分析 ( 太田一郎 , 宇都木昭 , 王瀚 )

DVD 等映像資料より収集した女性アニメ声優の音声を音響分析プログラム ( openSMILE ) で解析し , 倍音 , フォルマント振幅等の「声の質」に関わる音声パラメータの値を測定。「日本語話し言葉コーパス」に収録された一般女性の声と比較して , アニメ声優の声の音響的特性を特定した。

大学生等を対象とした発話実験とフィールド調査

#### a. 発話実験と「声の質」の知識の確認 ( 太田一郎 )

大学の声優養成コースで学ぶ女子学生 11 名 ( および対照のために男子学生 1 名 ) に対して , 文章朗読 , 短文読み , アニメの役割を演じたアフレコタスク等の産出実験で音声資料を収集し , 音響分析のための資料を Praat で作成した。

#### b. 調査協力者に関する情報収集と社会言語学的分析 ( 太田一郎 )

協力者の声優養成コースの学生に , 社会的特性 ( 属性 , 日常行動 , メディア実践等 ) や役割を演じ方における声の出し方などについて , 聞き取りによる情報収集を行った。

(2) 「声」の文化の制度化についての検討

アニメ文化の通史的検討（太田純貴）

文献資料および作品の分析により，1960年代から現在までのアニメ作品の変遷や文化的位置づけ等について，ポピュラーカルチャー論，メディア論等の観点から整理した。

「声」の音響特性に関する現代思想による検討（太田純貴）

声の音響的特性を，「声の肌理」や「触感性」などの現代思想の概念等を援用して現代思想的観点から「声」の制度化をとらえるために，関連する過去の知見を整理した。

(3) メディア論的視点でつなぐ新たな言語文化の研究の可能性の提示（太田一郎，太田純貴）

アニメをめぐる文化的状況を，文献や社会状況に関する情報の蒐集から得られた知見をもとに「声の文化的制度化」をとらえるための枠組みを整理し，新たな言語文化研究の可能性を探った。

(4) 鹿児島大学において以下のワークショップを開き，アニメと関連するメディア研究の分野の知見を得た。

(1) 「聴覚文化論の現在」，「声と身体をめぐる（複数の）回路」(2018年3月6,7日，講師：京都精華大学 秋吉康晴)

(2) 「アニメの声，アニメと声」，「アニメ・声・現代思想」(2018年9月25,26日，講師：山形県立米沢女子短期大学 小池隆太)

#### 4. 研究成果

主に以下の3つの成果をまとめた。

(1) アニメの声質（Utsugi, Wang, & Ota 2019, ICPhS 2019における発表）

アニメ声優の声の分析では，「この素晴らしい世界に祝福を！」と「ご注文はうさぎですか？」の2作品から，若手女性アニメ声優6名（20代）の音声を分析した。またアニメの声質の特性を明確にするために，日本語話し言葉コーパス（CSJ）に収録された同年代の6名女性の音声を対照群として分析した。分析対象は，劇伴音楽の入っていない台詞部分の母音（/a,i,u,e,o/）である。2つのアニメで455トークンを，CSJから448トークンを得て，音響特徴の測定を行った。測定したのは，周波数関連（Pitch, Jitter, Formants 1, 2, and 3 frequency, Formant 1 bandwidth），エネルギー関連（Shimmer, Loudness, Harmonics-to-Noise Ratio (HNR)），およびスペクトル関連（Alpha Ratio, Hammarberg Index, Spectral slope 0–0.5 kHz and 0.5–1.5 kHz, Formants 1, 2, and 3 relative energy, Harmonics difference H1-H2, Harmonics difference H1-A3）の計18のパラメータである。

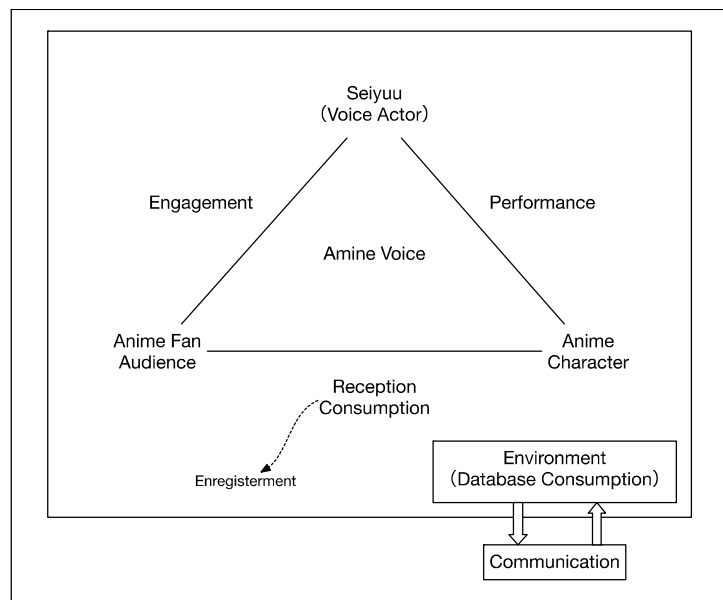
測定結果を，2way MANOVAで統計解析を行った。その結果，スペクトル包絡に関わるパラメータ（H1-A3, F1 F3 relative energy, alpha ratio, Hammerberg index, and spectral slope (0.5–1.5 kHz)）などにおいて有意差が見られた。これらのことから，アニメの声にはより多くの倍音成分が含まれることが示唆された。しかしながら，声質の個人差や録音環境の異なりなどの影響による可能性も否定できないため，今後はこれらの影響を排除した実験を行うことが必要なことを併せて指摘した。

(2) アニメ声の社会言語学的状況 (I. Ota, Utsugi & Y. Ota 2019, Language in the Media 2019 における発表)

Utsugi, Wang, & Ota 2019 と同様の音響分析を, 9名の女性声優の声と9名の一般女性について行った。対象は(1)と同じふたつのアニメ作品とCSJで, 分析した母音 /a/ のみ(声優 291 トークン, 一般人 222 トークン)。1 way ANOVA の結果, (1)と同じくスペクトル包絡に関わるパラメータオ (H1-A3, F1 F3 relative energy, alpha ratio, Hammerberg index, and spectral slope (0.5–1.5 kHz)) などにおいて有意差が見られた。

さらにこの研究では, 日本のポップカルチャーの歴史的分析を背景としながら, アニメの声が置かれる社会言語学的状況を捉える視点についても論じた。具体的には, (1) オタク文化とデジタルコミュニケーションの隆盛にともない, Azuma (2007)が述べるような文化の消費のあり方(または解釈の枠組み)が変容する中に, アニメの「声」を位置づけて検討する必要があること,

(2) そのような状況において, 声優, アニメキャラ, アニメファンの3つの要因の関係のあり方から描き出されるものとしてアニメの声の文化的制度化は論じられる必要があること, (3) それぞれの要因間での考察の対象となるのは, 声優とキャラの間の「演技(performance)」, アニメキャラとファンの間の「受容(reception) または消費(consumption)」, ファンと声優の間の「情的関与(engagement)」であることを指摘した。



### (3) アニメの声を文化論の議論に位置づける試み

「アニメ・声・身体の覚書」では以下の内容を論じた。すなわち, [1] アニメと声をめぐる(研究)状況を「声優・ファン・キャラクター」を頂点として整理し, [2] 声優の系譜を, ポップカルチャー史(特に1960年代以降の日本アニメ史と声優ブーム)を足場に洗い出した。この過程で, [3] 声優の定義をメディア史を踏まえて再検討しながら, 声優研究には声という聴覚的要素だけでなく映像という視覚的要素の不可欠であることを, 最新の研究を補助線として指摘した。以上を踏まえて, [4] 声(優)の議論における身体についてはC.S.パースの記号論的アプローチ(を用いた研究)に一定の有効性を認めつつも, その「類似性」や言及される身体概念を再検討する必要性を論じた。最終的には, [5] アニメ・声・身体の関係について, 重層的な声の受容を論じる聴覚文化論や, 「音象徴」のような音声学・言語学的知見の有効性も示唆した。

謝辞

アニメ DVD の利用を許可していただいた「このすば!制作委員会」, KADOKAWA, NBC ユニバーサル・エンターテイメント, 声優事務所(アイムエンタープライズ, 青二プロダクション, 大沢事務所, 81プロデュース, アクセルワン, ミュージックレイン)の皆様へ感謝申し上げます。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 太田純貴（訳）	4. 巻 86
2. 論文標題 メディアアートの考古学：ユッシ・パリッカとガーネット・ヘルツによる対話	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文学科論集	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 太田純貴	4. 巻 86
2. 論文標題 アニメ・声・身体についての覚書	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文学科論集	6. 最初と最後の頁 17-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 太田純貴	4. 巻 85
2. 論文標題 タイムマシンを生み出す場	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人文学科論集	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 太田純貴	4. 巻 46(4)
2. 論文標題 時間のショート・サーキットに逆撥じを	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『現代思想 現代を生きるための映像ガイド51』	6. 最初と最後の頁 198-201
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 太田一郎
2. 発表標題 アニメの「声」とその文化的制度化を言語学、現代思想、メディア論の協同で捉える試み
3. 学会等名 公開ワークショップ「アニメ、声、身体をめぐって」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宇都木昭
2. 発表標題 音響音声学からみたアニメの声
3. 学会等名 公開ワークショップ「アニメ、声、身体をめぐって」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 太田純貴
2. 発表標題 アニメ、声、身体について
3. 学会等名 公開ワークショップ「アニメ、声、身体をめぐって」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 王瀚, 宇都木昭
2. 発表標題 日本語の感情音声の声質にかかわる生理的特徴 録音音声の逆フィルタリングによる分析
3. 学会等名 東京音声研究会5月研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 王 瀚, 宇都木昭
2. 発表標題 日本語感情音声の産出における声質の特徴－GeMAPSを用いた分析－
3. 学会等名 日本音響学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 太田純貴
2. 発表標題 印象の時間 / 時間の印象     タイムマシン / タイムトラヴェル作品を題材に
3. 学会等名 第七回文芸共和国の会「印す・象る・消えてゆく（招待講演）」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ichiro Ota, Akira Utsugi, Yoshitaka Ota
2. 発表標題 Sociolinguistic situations of anime voice in Japanese pop culture
3. 学会等名 8th International “Language in the Media” conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akira Utsugi, Han Wang, Ichiro Ota
2. 発表標題 A Voice Quality Analysis of Japanese Anime
3. 学会等名 International Congress of Phonetic Science (ICPhS 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	宇都木 昭  (Utsugi Akira)  (60548999)	名古屋大学・人文学研究科・准教授    (13901)	
研究 分担者	太田 純貴  (Ota Yoshitaka)  (90757957)	鹿児島大学・法文教育学域法文学系・准教授    (17701)	
研究 協力者	王 瀚  (Wang Han)		University College of London 大学院生